

2025/5/18

「あなたは臆病ですか」

1:6 それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。1:7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。

皆さん、おはようございます。今日、皆さんにお会いできて光栄です。今月はOICで1回、そして6月と7月にも何回かメッセージを伝える予定です。来月からは、新約聖書の中で私が一番好きなヤコブの手紙についての連続説教を始めます。しかし、今日は別のテーマでメッセージをします。実は、今日は私が3年ほど前に行った説教を紹介することにしました。これは私の心に近いテーマであり、皆さんの多くが参考になるのではないかと思います。今日のメッセージのタイトルは「あなたは臆病ですか?」、そして人生の大半において、私はこの質問に「はい」と答えることができました。あなたはどうですか?臆病になったり、恐れを感じたりしたことはありますか?若い頃の私は内気で内向的で、失敗を恐れていました。しかし、主の助けによって、私はそのような感情を克服し、もっと大胆になり、もっと積極的に心を開いてチャンスをつかめるようになりました。もしかしたら、皆さんの中にも私と同じような思いで苦しんでいる人がいるかもしれません。それで、今日、この物語を分かち合いたいと思いました。それは、あなたが一步踏み出してチャンスをつかみ、クリスチャンとしての奉仕と証しに積極的になるよう励ますためです。クリスチャンの奉仕と証しに積極的になることを勧めるためです。恐れてはいけません。

テモテへの手紙第二 1:6-7 を読みましょう。使徒パウロが、宣教のパートナーであり弟子であるテモテに奨励の言葉を述べています。「1:6 それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。1:7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」

7節をもう一度読みます。「1:7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」これまでで、聖書を読んでいてこの個所にたどり着き、何度もこのみことばから語られました。それは、「おくびょう」という言葉があるからです。私はどちらかというと臆病な性格です。昔から引込み思案でした。皆さんは前に立って話す私を見ているので、意外だと思われるかもしれませんが、20代のころはとても内向的で恥ずかしがりでした。完璧主義だったので、失敗を恐れていたのです。

その聖句をもう一度見ましょう：「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、…」古い英語で書かれた欽定訳では、「恐れ」の霊と訳されています。私が調べた聖書辞典によると、ここで使われたギリシャ語の単語は「ディリアス」です。これは恐れる性質を指します。実は、これは私の性質そのものでした。聖書辞典には次のようにも書いてありました。「この霊は神から与えられたものではない。この単語は、臆病や小心を示し、良い意味で使われることは決してない。」

なぜこのトピックを持ち出したかと言うと、臆病で困っているのは私だけではないと思ったからです。もしかすると、ここにもそういう人がいるかもしれません。使徒パウロの宣教の働きにおける心強いパートナーであるテモテさえもそうでした。だから、パウロが彼への手紙の序盤にこう書いたのです。これは使徒パウロが書いた最後の書簡ですから、テモテはすでに宣教経験も牧会経験もあったはずで、それでも、臆病や恐れに困らされていたのです。恐れを振り払うことを、私たちは常に意識しておく必要があります。というのも、その影響が後々まで続く可能性があるからです。私のように完璧主義で自分を見つめる傾向が強い人はとくにそうです。自分を見つめる傾向が強い性格だと、自分にばかり目を向けてしまって、クリスチャンの集まりの中で与えられた賜物を使って奉仕するという役割があることを見失ってしまうからです。長い間、私はそうでした。

ずいぶん前ですが、ある宣教師の知恵が詰まった言葉を聞いたことがあります。一度聞いただけではわかりにくいかもしれませんが、こう言われました。「自分の箱に閉じこもっている人は、小さく仕上がる。」わかりましたか。「自分の箱に閉じこもる人」とは、20代の私のような人のことです。自

分に目を向けすぎて、社交的になって人と関わるのを恐れていました。あまりにも内向きなので、「自分の箱に閉じこもる人」は、「小さく仕上がる」のです。ここで、人生の箱を想像すると、小さな箱に仕上がります。中身はその人だけだからです。

けれども、その人が周囲に手を差し伸べるなら、その人はひとりではありませんから大きくなっていきます。ヘブル人への手紙 10：24-25「10:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。 10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」愛と善行を促すように注意し合い、励まし合うのです。

けれども、20代のころの私はほぼ、自分の箱に閉じこもって小さく仕上がった人という表現に当てはまっていました。完璧主義で内省的だったので、新しいことに挑戦するのを恐れていました。大失敗したところを見られるような恥ずかしい思いをしたくなかったからです。大勢の集まりでも、一対一で人と対面する場でも、失敗を恐れるあまり、人と関わりと息が詰まりそうでいつも黙っていました。これによって、私は対人関係においても信仰面においても、苦しめられていました。

テモテへの手紙第二 1：7 をもう一度読みます。「1:7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」恐れ、臆病の霊は、神から与えられたものではありません。神からいただいたのは聖霊です。聖霊が私のうちに生きておられるなら、神の力をいただけるはず、神の愛によって人を愛することができるはず、そして、慎みをもって生きられるはず。英語のニューアメリカンスタンダードバイブルという訳には、「慎み」と訳された単語に脚注がついています。そこには、この個所の「慎み」という単語は、「正常な判断」という意味だと書いてあります。古い英語の欽定訳聖書では、「健全な精神」と訳されています。慎みをもって生きるためには、健全な精神を持ち、周囲の状況を正常に判断する力が必要なのです。

この個所を読むと、臆病や恐れに捕らわれる必要はないのだと思い出させてくれます。臆病や恐れは、私に新しいいのちを与え、聖霊を宿してくださった神からのものではありません。むしろ、私にも皆さんにも、力の霊が与えられています。愛の霊が与えられています。そして、正常な判断の霊、慎みの霊が与えられています。

ヨハネの手紙第一 4:18「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」神の愛は、私たちに恐れさせるものではありません。むしろ、神の完全な愛は恐れを締め出すのです。それが実現するよう、私たちの心の中で神に働いていただくべきです。主がそうしてくださることを思い出すと、私は大胆に踏み出すことができます。

ローマ 8:15「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます。」私たちは、神の家族へと迎え入れられました。ですから、天の御父の愛に満ちた御腕の中で安心していられます。

イエスはヨハネ 14：27 で弟子たちに語られました。「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」繰り返します。「あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」

ピリピ人への手紙 4:13「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」は、私のお気に入りの聖句の一つです。

以前、「失敗：成功への裏口」という本をもらいました。最初の数ページを読みましたが、その先は読みませんでした。今も本棚においてあって、本の題名が時折目に入ります。「失敗：成功への裏口」という題名は、この本の主旨を物語っています。何か新しいことに挑戦すれば、失敗や挫折はつきものということです。人間ですから、たまに失敗するのは恥ずかしいことではありません。失敗から学び、取り組み方を変えるなどの工夫をして、成功へとつなげるのです。これは、気が付くと価値のある事です。しかし、それを実践するには長い時間が必要でした。私は長い間、先ほど述べたよ

うな、失敗を恐れて黙っている人間のままだったのです。

ここで、私自身のことをお話ししましょう。昔の私からここに立っている今の私にたどり着いた証を詳しくお話しします。

先ほどお話ししたとおり、20代の頃の私は、失敗に対する恐れにがんじがらめにされていました。ですから、失敗してしまう可能性のある状況を避けていました - 特に他の人の前で

後に、私はこの問題を克服するためにおもしろい方法を思いつきました。ずっと夢見ていた世界一周旅行を実現させたのです。もちろん世界中を見たかったのですが、旅に出れば自分を守る殻を破らなければならないこともわかっていました。このふたつは、私にとって旅の大切な目的でした。外国で列車の切符を買ったり、その夜宿泊できるホテルやユースホステルを見つけたりするためには、自分の殻を破って人と話さざるを得ません。簡単なフレーズを外国語で言わなければならないこともあります。旅先で人と出会えば、対人面でももう少し勇気を出せると思いました。いつもより勇気を出して人と関わったことで、旅が終わるまでにはずいぶんと自信がつきました。一年間の世界一周旅行から帰った私は、まるで別人でした。

さて私は、自信がついて別人となってカリフォルニアに戻りました。まもなく、サンディエゴのバプテスト教会の教会員になりました。私は教会の中で関りを持つ道を探していました。私達皆、キリストの体である教会のアクティブなメンバーであるべきです。そして、私達夫々は、教会の中でミニストリーの場所を探することができます。それからほどなくして、小さな奉仕を始めました。聖句を暗唱する子どもたちの聞き役です。その後、牧師から男性のリトリートを計画してほしいと頼まれました。

ここで8年ほど時をさかのぼってお話します。私は大学時代に、インターバーシティ主催のアーバナ学生宣教大会に参加しました。そこでは、ジョン・ストット、エリザベス・エリオット、ルイス・パラウ、ビリー・グラハムといった著名な講師による素晴らしい教えや講義が聞けました。大会で彼らは、大学生の若者たちに次のように勧めていました。「短期宣教を試してみなさい。夏休み中でも、一年でも二年でも。そして、フルタイムの宣教の働きに召されているか確かめてみてください。」その勧めは、大会の後何年も私の心の奥底に残っていました。さて、それ以後カリフォルニアでの小規模な宣教大会には参加したものの、それから10年近くその勧めを実行していませんでした。

そして30歳になる直前、私は主に「目を覚まさせてください」と祈っていました。現状に満足してのほほんとしていたからです。けれども、これは危険な祈りでした。神はすぐに目覚めさせてくださいました。神がどのようにしてそうされたのか、詳しくは説明しませんが、それは劇的なものでした。それで、「主よ、わかりました。何を語ろうとなさっているのですか」と尋ねました。次にあった教会のシングルの集会で、ある女性が前の年の夏に日本へ短期宣教に行った経験談を分かち合ってくれました。彼女が参加したのは10週間のプログラムで、米国や英国から100人のクリスチャンが日本各地の教会に派遣され、教会で英会話を教えます。英会話レッスンの後に日本人の教会員が日本語で短く福音について話すというものでした。前にもそういう話を聞いたことがありました。宣教師が英会話レッスンをきっかけに日本人の人たちを教会に誘い、福音を伝えるのです。主が私にこのプログラムを見るよう望まれたのだと思います。良いプログラムだと思ったので、私も翌年の夏に参加しました。平成元年のことでした... 1989年。

プログラムは素晴らしかったのですが、私は不安でした。新しいことに真剣に取り組むために一歩踏み出すのは恐怖でした。けれども、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」日本でどんなことに直面するかと恐れることもありました。奉仕でおかしなことをしてしまったらどうしよう...英会話の教室で大失敗したらどうしよう…。けれども決心がつきました。そういうことが起こるかもしれないけれど、前に向かって歩いて行こうと決めました。あのアーバナ学生宣教大会で語られた「短期宣教を試してみなさい」という勧めを実行するときだと主が語ってくださったように感じたからです。

こうして私は夏のプログラムに参加しました。主催者は、英語を教えること、文化の違い、宣教についてしっかりと事前トレーニングをしてくれました。文化の違いによる大失敗はありましたが、英会話クラスでの大失敗はありませんでした。そして翌年の夏も参加しました。2度目だったので、文化の

違いによる失敗も減りました。6週間の英会話プログラムの最後にはイングリッシュキャンプがあるのですが、主催者からそこで司会をするよう頼まれました。大勢の前に出るのは苦手なのに司会とは…でもやり遂げました。神は、力と愛と慎みとの霊を与えてくださっているのです。

その後、四国にいる宣教師が1年間英語を教える手伝いをしてくれる人を探していると聞いて、そこに行きました。またいろいろと失敗しました。それに寂しさにも苦しめられました。四国での一年は良い経験もあればそうでない経験もありました。

その一年の終わりに、アーバナ学生宣教大会での勧めを実行したと感じました。夏のプログラム2回と四国での一年という短期宣教を試したのです。そして、フルタイムの宣教の働きに召されているようには感じませんでした。

それでこう結論付けました。誰もがフルタイムの働きに召されているわけではないけれども、私たちは皆、フルタイムのクリスチャンとして生きるよう召されている。私たちは、常にクリスチャンとして生きるように召されています。クリスチャンとはキリスト者という意味です。キリストという名を帯びているなら、聖書に記された教えに従って生きることを誓い、キリストのからだである教会に積極的に関わる一員となるべきです。

短期宣教を経て帰国した私は、何人かの人からかけられた言葉に驚きました。「日本に住むなんてすごね。私はそんなことできない」といった内容です。正直なところ、私にとって日本に住むのはそれほどたいへんではありませんでした。英会話を教えるのは楽しかったです。私は米国と日本を比べて、米国にはたくさんクリスチャンの証人がいますが、日本にはほとんどいないことがわかりました。それで、再び日本に行くことにしました。英語を教える仕事と英語で礼拝をする教会へと神が扉を開いてくださる可能性を祈りました。そして、神はそうしてくださいました。こうして私は関西地方に33年暮らしています。そのほとんどの期間、OICにきています。

私たちは皆、教会、キリストの体の活動的なメンバーであるべきだというのが私の信念だとお話しました。そして、私はOICのミニストリーのどこかでアクティブでありたいと願ってきました。1990年代には、教会のために日帰旅行を計画するなど、小さなことから始めました。そして、最初は少し気が引けましたが、時々聖書勉強会を開いてきました。神のことばの教師になることは、重要なことです。

最近では、皆さんもご存知の通り、私は時折説教もします。10年くらい前なら、そんなことができるとは思っていませんでした。けれども、8年前にアリスティア牧師から説教をしてくれないかと依頼を受けたとき、冷静に「お受けします」と答えました。神学校は出ていませんが、大学時代から一生懸命聖書を学んできました。聖書を読み、信仰書を読み、あらゆる説教をテープやiPodで聞いてきました。その間に、たくさん知識を吸収しましたから、それを皆さんにお分かちしているわけです。最近ではこういうかたちで奉仕させていただいています。

ここまでお話したのが、今日のメッセージの第一部です。

第一部：臆病にならない。

臆病は神からのものではありません。そうではなく、神からいただいたのは「力と愛と慎みとの霊です。」神にしっかりと目を向け、聖霊によって神が与えてくださる力に頼るなら、私のように臆病から解放されます。忘れないでください。私たちには、御霊が内住しておられます。そして、神が私たちに望まれる奉仕や働きに必要な力を御霊が与えてくださいます。神は私たちひとりひとりに、少なくともひとつ霊の賜物を与えておられます。それは、クリスチャンコミュニティの益のために用いるためです。このトピックについては、コリント人への手紙第一12章を参照してください。そして「奉仕の場」というタイトルで、数年前に私がここで行った説教を聞いてください。

今日のメッセージの第二部は「怠けない」です。

第二部は第一部より短いですが、お読みする聖書箇所は長いです。マタイの福音書 25 章 14-30 節のタラントのたとえです。ところで、キリストが地上におられた時代のユダヤでは「タラント」というのはお金の単位で、硬貨ではありません。大金を指す慣用表現に使われた言葉で、日本語でいう「一億円」のような感じです。労働者の約 20 年分の賃金に相当する額でした。このたとえは、神が与えてくださったものを無駄にせず、忠実であるように、と教えてくれます。

25:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。25:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。25:16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。25:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。25:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。25:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。25:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』25:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』25:22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』25:23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』25:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。25:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』25:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。25:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。25:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』25:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。25:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ざしりするのです。

まずこの個所で気づくのは、私たちには各々違った能力があることです。神は私たちが持っている能力に合わせて、それぞれ違った務めを与えてくださっています。ですから、能力的に無理な務めを与えられることはありません。人はそういうことをしても、神はなさいません。神が私たちに与えられる責任は、私たちの能力に見合った内容です。このたとえに照らして私自身のことを考えると、私はこの話の中の 1 タラントの人でもなければ、5 タラントの人でもないと思います。私は 2 タラントの人だと思います。

この数年、私はこれまで与えられた素晴らしい特権について考えています。とくに、クリスチャン生活で与った特権です。私の母は町で一番の日曜学校がある教会に私たち兄弟を連れて行ってくれました。ルーテル教会の日曜学校で信仰の土台がしっかりと築けたことは以前にもお話しました。他にも信仰の土台を築いてくれたものがあります。夏になると、母は私たちを子ども向けの夏休みプログラムに参加させました。そこでは、聖書やクリスチャンとして生きることについてさらに教えてもらいます。さらに、YMCA のキャンプやボーイスカウトにも参加しました。UCLA で過ごした大学時代は、クリスチャンクラブに加わり、それがきっかけでジョン・マッカーサー師の教会にも行けました。私は、彼の教会に 5 - 6 年間、出席していました。大学のクリスチャンクラブのモットーだったテモテ第二 2 : 15 の「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」というみことばを真剣に受け止めました。「努め励みなさい。」「真理のみことばをまっすぐに説き明かす…」また、常に「畏れかしこんで真理を探し求める」というクリスチャンクラブのメンバーの誓いも真剣に受け止めました。ですから、私は教会が直面する神学的かつ実践的な問題について理解しようと常に努めてきました。正確な教えと実践を知ろうと努めました。

そういうわけで、ここで説教をすることについてアリストア牧師からお話をいただいたとき、「はい」と答えるしかないと思いました。そう答えるのが自然だと感じたのです。なぜか、前ほど恐れは感じませんでした。子どものころや若いころから素晴らしい特権に与ってきたことについて考えてい

たおかげでしょう。これまで学んできたことや考えてきたことの一部を皆さんに分ち合う責任があると感じているのです。

タラントのたとえに話を戻しますが、この話で次に気づいたことがあります。しもべたちは主人から預かったお金で商売をし、その努力が実を結びました。彼らは実を結んだのです。私たちも、神に与えられた務めをすれば、実を結べます。

3つめに気づいたことは、3人目のしもべの残念な話です。彼は抑圧によって行動できず、主人から預かったものを放置しました。それは抑圧でしょうか。それとも恐れ、怠惰、不信仰でしょうか。それらすべてが当てはまるかもしれません。いずれにせよ、何ができるか考えたり、率先して行動したりはしませんでした。26と27節をもう一度ご覧ください：「ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。... だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。』銀行に預けて利息を稼ごうとも考えなかったのです。」

この話の中でいう「利息がついて返してもらえた」というのは何の象徴だろうと考えたことがあります。少しの能力がある人に、神が教会で奉仕できる小さなチャンスを与えてくださったとします。けれども、なぜかその人はその奉仕をしません。けれども少なくとも、信仰をもって何か役立つことをしようとし、少なくとも、というのは、きよい生き方をする、献金をいくらかする、あなたが会う人々に励ましの言葉をかける、ということも挙げられるでしょう。何かしましょう。何もしないのはやめましょう。神の御国と神の民、神の被造物に何の益ももたらさないことに人生を費やさないでください。3人目のしもべの残念な話から、何もしないことはすべてを失うことだとわかります。負けです。

さて、今日皆さんとお読みする最後の聖書箇所です。この箇所は、去年にクリスチャンの競走を走り抜くというテーマでお話したときにも読みました。そこには、終わりの時に神からいただく報いについて記されています。コリント第一3：11-15には、クリスチャン人生の土台の上に何を築くかについて記されています。そして、終わりの時のさばきの日には、私たちが成し遂げた業がどのようなものであったかが露わになると語ります。役に立つものであったか無益なものかです。この箇所では、役に立つ業は金、銀、宝石に象徴されています。一方、役に立たない業は、木、草、わらに象徴されます。では読みましょう。

3:11というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。3:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、3:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。3:14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。3:15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

土台の上に役立つ働きで築いたクリスチャンは報いを受けます。一方、土台の上に無益な働きで築いたクリスチャンは報いが得られません。その人自身は救われますが、報いがもらえません。競走に負けたのです。勝利を目指して走らなかったのが負けました。何とも残念な結果です。私はそうなりたくありません。

コリント人への手紙第一 9:24 「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。」

最後に、皆さんへの励ましの言葉で締めくくります。

臆病にならないでください。神が私たちに望まれる務めを成し遂げるための力は、神が与えてくださいます。

怠けないでください。何もしなければ、失います。そして教会は敗北します。失われます。

実を結びましょう。神が与えてくださった能力や賜物を用いましょう。

無益な業で築いてはいけません。金、銀、宝石（役に立つ仕事）によって築きましょう。

勝利を目指して走りましょう。